

●五六豪雪月曜エッセー

月曜エッセー

五六豪雪

五葉 桂悟

2000年7月24日

（月）

～五六豪雪（月曜エッセー：福井新聞 2000.7.24）に掲載された内容です。～

20年ぶりに卒業生のJ君が訪ねてきた。大阪で不妊治療専門のクリニックを開院した報告に来たのである。それで研究室OBが集まってささやかなコンパを開いた。

工学部の卒業生がクリニック？と不思議に思われるかもしれない。

実は、J君は在日韓国人である。四年生の折、在日韓国人学生を組織して就職活動をしていたが思わしくなく、やむを得ず大学院へ進学した。当然、研究に迷いがあった。

ある日、私は彼を呼びだした。

「J君、就職活動で分かったろう。日本には厳然と民族差別がある。それよりもどうだろう。大阪大学医学部に学士入学制度というのがあるのだが、思い切ってそれを受けてみないか」

しばらく考えていた彼は「先生、それをやってみますわ」と言った。関西人の彼は決して秀才タイプではなかったが、快活で積極性があった。当時、既に阪大の学士入学制度は難関中の難関であった。しかし、私は彼の性格と能力があればやれるとみたのである。

受験のためには当然、情報を集めなければならない。全く知人のいない阪大に対し、彼は一計を案じた。なけなしの小遣いで手土産を買い、阪大医学部の前で医学生をつかまえて学士入学した人の紹介を頼んだのだという。紹介された人が幸運にも秀才で、現在の東大医科学研究所のM教授だという。結局、その人のコーチを受けて三年目に入学することになる。

以後、紆余曲折を経て、クリニックを開設するのであるが「先生、あの時はほんまに助かりました。受験勉強をしていた正月、どうしようかと思っていたら、お宅に呼んでもろた上、奥さんにおせちを作つてもろたんです。金がなかつたら、下宿まで重箱抱えて五六豪雪の中を歩いて帰つたんですわ。」

その言葉で思い出した。彼が帰つた後、折からの除夜の鐘の音に誘われて、妻と二人、近くの小さな社に、高校受験の長女と彼の合格祈願に出かけたのであった。その帰途のしんしんと降りしきる真っ白い道が鮮明によみがえった。